

会議録

会議の名称	西東京市教育計画策定懇談会（第3回）
開催日時	平成24年11月13日（火曜日） 午後2時10分から午後4時まで
開催場所	田無庁舎202・203会議室
出席者	出席委員：羽豆座長、須永副座長、藤田委員、佐々木委員、堀内委員、松村委員、高野委員、西嶋委員、大島委員、鈴木委員、橋本委員 欠席委員：渡辺委員、近藤委員 事務局：池澤教育部長、櫻井教育部特命担当部長、坂本教育企画課長、山本学校運営課長、清水教育指導課長、西谷教育支援課長、磯崎社会教育課長、相原公民館長、宮坂教育部主幹、早川教育企画課長補佐、倉本企画調整係長 傍聴人：0人
議題	1 会議録の確認 2 市民意識調査の中間報告 3 ヒアリング調査について 4 その他
会議資料の名称	資料1 西東京市教育計画策定懇談会第2回会議録（案） 資料2 西東京市教育計画策定のためのアンケート調査（集計結果速報） 資料3 西東京市教育計画策定のためのアンケート調査 実施・回収状況 資料4 ヒアリング調査の実施について
記録方法	☐ 全文記録 ☒ 発言者の発言内容ごとの要点記録 ☐ 会議内容の要点記録
会議内容	
開会 事務局より、欠席者、資料の確認（渡辺委員、近藤委員欠席） 1 会議録の確認 第2回西東京市教育計画策定懇談会の議事録について、修正等の確認（修正なしで承認された。） 2 市民意識調査の中間報告 事務局より資料3説明 インテージリサーチより資料2説明	

1.一般市民調査・青少年調査

○羽豆座長：

まずは、「1 学習や活動の内容」「2 学習や活動ができない理由、しない理由」について意見や感想を伺いたい。世代や性別によって違いが見られたようだが、何か気づいたことはあるか。

「2 学習や活動ができない理由、しない理由」では、「開催されている講座や利用できる施設などがわからないから」、「どうやって活動すればいいかわからないから」等があげられている。今後の施策では、わからないということに対してどう対応するかが課題になると思う。

「3 西東京市の学習環境」「4 公民館の利用状況、利用しない理由」「5 図書館の利用状況、利用しない理由」についてはどうか。

○大島委員：

公民館については予想されたとおりで、「利用の仕方がわからない」、「公民館で行っている事業に対して興味がない」という、一番聞きたくない回答が出ている。専門員がいるし、職員も応対できるのだが、残念に思う。

○羽豆座長：

若い世代の参加が少ないようだが。

○大島委員：

30代の参加はあるが、40代、50代の働き盛りの世代は、やはり利用が難しい。

○羽豆座長：

若い世代をどう取り込んでいくかが今後の課題になる。

○須永副座長：

公民館での講演を聞きに行ってきたが、60代、70代が圧倒的に多い。男性、女性共に若い世代は全然参加しておらず、寂しい気持ちが出た。「1 学習や活動の内容」の結果を見ると、一般市民も青少年も、社会問題に対する関心が低いのが気になる。公民館等でいいことをやっても伝わらず、多くの市民が参加しない状態で、関心の低さは危険な状況だと感じた。

○堀内委員：

高校生は主に勉強で図書館を利用するし、掲示物も目にする。公民館も、静かに勉強できる環境があるとわかれば、若い世代も利用するかもしれない。時間を割いて講座に参加するのは難しいかもしれないが、掲示物を見たり、社会問題について考えたりする機会になるかもしれない。社会問題に関心がないわけではない。

○大島委員：

若い世代のロビー利用が増えると、だんだん慣れてきて講座への参加にもつながる。ロビーをどんどん利用してほしい。

○西嶋委員：

公民館は、西東京市のひとつの特徴だと思う。公民館自体を設置していない自治体もある中で、都内でも指折りの活発な活動をしている。若い世代が興味を持ちそうな講座を開いているし、貸しスタジオも持っている。しかしこの結果を見て、同じ人が利用していて広がりがないと感じた。紙ベースで情報を得ようとする若者は見たことがないので、市役所や公民館がインターネット端末等で情報を検索できるようなやり方をしていくべきだと思う。

○羽豆座長：

広く知ってもらおう努力が必要だ。

○西嶋委員：

現在はあまり知られていないように思う。知っている学生は利用している。

○インテージリサーチ：

今回の調査では、公民館だよりの閲読状況についても聴取している。一般調査の結果は、「毎月、必ず読んでいる」**22.3**パーセント、「ときどき読んでいる」**41.9**パーセント、「「公民館だより」があることは知っているが読んだことはない」**16.7**パーセント、「「公民館だより」があることを知らない」**15.7**パーセント。毎月読んでいるのは**60代、70代**に多く、公民館だよりを知らないのは**20代、30代**に多い。

○羽豆座長：

図書館についてはどうか。

○鈴木委員：

場所や開館時間も関係あるのかもしれないが、男性**50代**の利用が少ないのが不思議だ。西東京市の学習環境の中では、図書館は利用しやすいものと評価されているようなので嬉しく思う。

○橋本委員：

何年か前に、図書館が貸出用の袋を市民に配布した。それを利用している親子連れを良く見かけたので、図書館を利用していることを肌で感じる事ができた。促進につながるような事業がまたあるといいと思う。

○羽豆座長：

小・中学校と図書館の連携は今後大事なポイントになってくる。子どもたちにも図書館を利用してもらって、読書意欲を高めてほしい。

○松村委員：

別な市の話だが、館内にDVDが見られるスペースがある図書館は常に混んでいた。DVDを見たくて来るのだが、帰りには本を借りていく。くつろげるスペースがあると寄りやすい。**50代男性**は自分で買って自分で読むので、利用が少ないのではないかな。

○鈴木委員：

今の図書館の蔵書構成からすると、ビジネスマンにとってトレンドのものは手取りにくいかもしれない。予算の関係もあるので、全年代層に向けた本をどう取り入れていくか、ということになる。

DVDについては、建物や設備が鑑賞を前提としていないと難しい。古い図書館が多いが、子ども向けのスペースはどこにも必ずあるし、おはなし会もある。

○佐々木委員：

小さな子ども向けの本は多いので、20代、30代の母親が子どもを連れて図書館に行く。その後が課題だと思う。

○羽豆座長：

「6 地域・社会活動への参加意向」についてはどうか。

○橋本委員：

一般市民調査の結果を見ると、男性60代の「学校の行事やイベント」に対する参加・協力意向が高いが、本当だろうか。参加したいという気持ちはある、ということだろうか。

○佐々木委員：

学校の行事やイベントが一番身近で参加できるものだと思うが、PTAで活動していても、参加するのは一握り。内容にもよるが、平日の参加は難しい。土曜日参観だと比較的多く参加してもらえるが、時間がないというのが実態だ。

○松村委員：

今は、学校も色々な人が入るのは危険になっている。他の市の話だが、学校の中に図書ボランティアや水やりなど、地域の人が参加しているところがあった。地域で学校を支え、普段から関わられるようにする学校づくりも大切だと思う。

○羽豆座長：

結果を見ると、青少年の参加意向が高い。「学校の活動」、「地域の活動」の二つの要素があるが、青少年の上位2項目は「学校の活動」があげられている。

○高野委員：

青少年調査は主に高校生年代が対象だが、地元にいる高校生はまずいない。どこの小・中学校をイメージして回答しているのだろうか。高校生が学校の活動に参加することはまずない。招き入れる呼びかけや努力が必要だ。

地域ボランティア等、垣根を低くすることは大事で、これから検討していかなければならない。

○羽豆座長：

「7 学校教育で教えることで重要なこと」「8 いじめや不登校等の防止のために必

要な対策」についてはどうか。

社会的には、学校で教えることとして「学力」と言われているが、結果を見ると「思いやりの心や、善悪の判断など、道徳心」や「社会生活に必要な常識やマナー」等があげられている。

○西嶋委員：

学校は学習を基本として教えるところで、しつけ等は家庭でお願いしたい。道徳心等の豊かな心の育成を、一般市民は家庭教育よりも学校教育に期待しているというのは残念に思う。

○佐々木委員：

「8 いじめや不登校等の防止のために必要な対策」で、一般市民が「親が子どもを見守り、実態を把握すること」を一番にあげているのはほっとした。全部学校ばかりに求めているわけではない。学校で勉強を教えてもらうのは当たり前になっているので、「学力」についてはあえて選択されていないのかもしれない。学校では社会的な面を育てるのも大きなこと。集団行動はなかなか家ではできないので、そちらが目立ってしまう。

○羽豆座長：

「7 学校で教えることで重要なこと」の青少年調査結果でも、「思いやりの心や、善悪の判断など、道徳心」がトップになっている。

○須永副座長：

一般市民と青少年の結果が同じなのが面白い。一般市民は親の悲鳴で、自信をなくしているとも読める。今、親は色々なことで不安になっていて、学校に何でも持っていつてしまうところがある。子どもはどうしてこのようなことを書くのだろうか。

○鈴木委員：

もう勉強のことは言われたくない、ということではないか。

○堀内委員：

「重要だと思うこと」と聞かれたので、このような結果になったのではないか。子どもが学校生活で悩むのは、学力のことよりも人間関係や社会に直面することだと思う。

○羽豆座長：

いじめや不登校の問題についてはどうだろうか。一般市民は「親が子どもを見守り、実態を把握すること」ことをトップにあげており、青少年では「学校の先生が児童・生徒を観察し状況を把握すること」がトップになっている。

○佐々木委員：

青少年は、いじめを「学校の中の問題」だと思っているのではないか。

○須永委員：

いじめられている子は親には言わないと思う。親に言ったら大変なことになると皆思うので、先生に何とかしてほしいとなるのではないかな。

○羽豆座長：

この問題にどう対応するかは、今後の施策策定においても重要な課題になってくる。

2.小学生調査・中学生調査

○羽豆座長：

小・中学校で、同じ傾向のもの、異なる傾向のものがあるようだ。まず、「1 学校の楽しさ」、「2 学校で困っていること」について、どうか。

○西嶋委員：

中学生の「学校で楽しいと思うところ」について、前回調査では授業は何パーセントか。

○インテージリサーチ：

前回調査では10.5パーセントだった。

○松村委員：

一日の大半を過ごす学校では授業の時間が一番多いが、授業が楽しいと感じている子どもが少ないのはショックだ。せめて給食よりは楽しいと感じてほしかった。授業がわからないという子どもが多いのも気になる。授業がわからないから楽しくないのだと思う。わからない状態で1日6時間机に向かっている苦痛を考えると、わかるようにしてあげてほしい。

授業がわからないことがストレスになっているのであれば、わかるようになればいじめ等も減るのではないかなとも思う。

○大島委員：

前回調査よりは「楽しい」と思う割合は上がっている。

○羽豆座長：

徐々によくはなっているようだ。

○堀内委員：

小学校にインターンシップで行っているが、一人の先生で全員を見るのはとても難しい。勉強に集中できない子、苦手な子がいるが、付きっきりで教えてできるようになると笑顔になるので、楽しく感じるのだと思う。やりたいという気持ちも、わかりたいという気持ちもある。教員を増やすのが難しいのであれば、ボランティア等を活用しないと厳しい。

○羽豆座長：

授業がわかれば、学校は楽しいだろうか。

○堀内委員：

わからないのは苦痛だと思う。わかるようになればストレスも減るので、いじめ問題にも関係してくるのではないかな。

○高野委員：

小学生が学校で困っていることのトップは「いやな友だちがいる」で、4人に1人当てはまる。集団はそんなものだが、「いやな友だちがいる」ことをどう解決していけばよいか、学校で考えていく必要がある。休み時間に一緒に遊ばせたり、体験学習をさせたり等、学力の問題とはまた相反する課題がある。

○佐々木委員：

そういう人がいて当たり前だということも学ばなくてはいけない。いじめ等の、より重要な問題になってくるとまた話は別だが、この選択肢が1番になってしまうのは困る。

○西嶋委員：

中学生の結果について、「授業」の楽しさが低いことがショックだ。どこの学校でも生徒による授業評価をしているが、8割の生徒は授業がよくできると答えている。中学生の間7で「学校の活動で大事なものは何か」と聞けば、「授業」と答えるのかもしれない。子どもたちが「学んで楽しい」と思えるように頑張らないといけない。

○橋本委員：

勉強には、覚えられないといけないという苦痛もある。友だちと一緒にいる、という楽しさとは質が異なるので、単純に比較するのは難しい。

○羽豆座長：

わかる授業を作っていくのは、今後の大きな課題のひとつだ。

○松村委員：

授業は、大人が「辛いもの」と位置づけているのが問題だと思う。勉強と遊びは並列でもよい。勉強は楽しいものだという働きかけも必要だ。

○鈴木委員：

わかれば間違いなく楽しいが、休み時間に友だちという楽しさとはまた別だ。学校の楽しさは授業だけでなくもいいと思う。授業で頑張れない子が、他に楽しみがなかったら、学校にいるのは辛い。図書室なら学校にいける、という子どももいる。そういう子どもたちにとっては、授業に入る前提として、学校の存在を受け入れられるようになってほしい。授業だけでなく、休み時間や給食、遠足が楽しいのもよいのではないかな。

一般市民や青少年調査の結果でも、学校に求めるのは「学力」ではなく「思いやりの心」や「道徳心」となっていた。学校で勉強をするのは当たり前で、自分以外の色々な人がいる中でどうすればよいか、というのが学校でなければ学べないことだと思う。学校の楽しさの中には、授業以外の充実感も大事だ。

○松村委員：

評価を前面に出すと辛くなってしまう。学校では色々な経験をするのが大切だと思う。勉強する楽しさが学べればよい。

○羽豆座長：

勉強や授業、学校の役割を考え直すよい機会だ。「3 学校や先生に望むこと」の結果を見ると、「体験学習などをたくさんできるようにしてほしい」が上位にあげられている。こういう子どもたちの声は参考にすべきだが、授業日数という問題もある。

○西嶋委員：

子どもたちが体験学習を期待しているのは嬉しいことだ。学校でもできる限り機会を作ろうとしている。

○佐々木委員：

中学生の女子は「先生にはみんなに平等に接してほしい」の割合が高い。自分にも目を向けてほしいと考える年頃なのか。先生が不平等にしているのとは違う話で、自分をきちんと見てほしいという欲求が強くなるのかもしれない。そのように感じている子どもたちにはケアが必要だと思う。

○高野委員：

小学6年生の女子も高い割合だ。第二次性徴に入り、そのように感じる子がいるということ意識しなければならない。

○羽豆委員：

以前、教員養成課程の学生にアンケートをとった時は、小・中学生時に一番嫌だったこととして「えこひいき」「不公平な接し方」がトップだった。

○堀内委員：

えこひいきがあった、嫌だったという話は実際に聞く。

○羽豆座長：

今後どうしていけばいいだろうか。先生と生徒との関係の持ち方は大事な問題だ。

○高野委員：

この問題を考える時には、特別支援教育の考え方との整合性をきちんととる必要がある。「学校に遅れてきてもいい子」、「保健室登校してもいい子」に対して、「自分も我慢しているのに」という思いはある。そうであっても特別支援教育を進めるために学校の技量を高めていかなければならないし、保護者に対しても啓発していかなければならない。子どもは、頭ではわかっていても心ではわかっていない、ということがある。

○羽豆座長：

「4 通っている塾や習い事」「5 学校以外の過ごし方」「6 近所との付き合いの

程度」についてはどうか。

○鈴木委員：

塾に通っている割合は高いだろうと思っていたが、想像以上だった。塾に行くのが悪いことだとは思わないが、行かないといけないうい思い込んでいる面はないだろうか。中学受験をする人が増えているのだろうか。

○高野委員：

子どもの立場からいうと、3つの種類がある。まず、進学のための場合は、3年生の後半から塾に行き始める。2つ目は友だち探しに行く場合。3つ目は、進学はしないが、勉強するために親が行かせる場合。行っているからよい、悪いということはないが、学校側としては、下校時刻をきちんと決めないといけないういが大変だ。年々時間通りにしなければならなくなっており、子どもも忙しくなっている。

○西嶋委員：

毎日塾に行っているわけではない。週1〜2回程度。保護者や担任教師から話を聞くと、子どもが家でごろごろしていたり、テレビやゲームをしていたりすると、親子でケンカになってしまうことがあるようだ。塾に行くことで、お互いにストレスが発散できるということもある。皆も行っているから自分も行く、というケースが多いのではないか。中学3年生の受験期になると、塾に行く方が時間がもったいないと塾をやめたり、自宅で集中してやったりする生徒も増えてくる。

○佐々木委員：

子どものいる場所が学校しかない、と友だちとトラブルがあった場合の逃げ道がなくなってしまう。学校以外にも居場所があることで、ストレス解消になったり、問題が解決できたりすることが多い。自分の場所を何箇所か作るとは親として大事なことだと思うし、習い事をしている子どもが多いのはよいことだと考えている。

○藤田委員：

低学年のうちは児童館でも居心地よく過ごせるが、小学3年生以上になると低学年のための場所となって、遊べる場所ではなくなってしまう。公民館や図書館等、子どもたちが居られる場所を作ると、塾に行かなくても友だちがいる空間になる。

○橋本委員：

親の帰宅時間も大きな問題だと思う。一人で寂しく自宅にいるより、親が安心できるスペースに預ける気持ちで活用する、ということも今は考えられる。

○羽豆座長：

最後に、「7 家族と話す内容」「8 相談相手の有無、相談できる相手」「9 自分に自信のもてるところ」について、意見や感想を伺いたい。

○鈴木委員：

中学生になっても親とよく話しているようだ。

○佐々木委員：

男女差がある。相談相手を見ると、小学6年生と中学2年生の女子は、母親には相談するが、父親に相談する割合は低い。

家族とどんな話をするかは、個人個人の差が大きい。家庭によって子どもから得られる情報量が異なるが、親同士で情報交換ができれば問題ないと感じている。

○鈴木委員：

インターネットは、投げかければ何でも返ってくる。その答えが適切かどうかは判断が難しい。この点に大人はどう関わっていけばよいだろうか。スマートフォンやタブレットの普及で、小学生が利用するケースもこれから増えていくかもしれない。

○橋本委員：

親と話す内容は、23区と比較するとかなり異なると思う。西東京市は落ち着いていると感じた。

○羽豆委員：

今の若者は自尊感情が低いというが、これについてはどうか。

○藤田委員：

早いうちから習い事をする子どもが多いので、自分よりも上がいることを感じやすいのではないだろうか。親は比べていないつもりでも、子どもにとっては比べられていると感じることもあると思う。

○羽豆座長：

このあたりを学校教育や家庭教育でどう育てていくかが課題だ。

3 ヒアリング調査について

事務局より資料4説明

○羽豆座長：

ヒアリング調査について意見があれば、事務局に直接伝えてほしい。

4 その他

今後の懇談会日程

- ・第4回 平成25年1月28日（月曜日）14時00分～16時00分
- ・第5回 平成25年2月21日（木曜日）14時00分～16時00分

以上